
ヤマアラシと雨とパンダの脱走

布切れ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤマアラシと雨とパンダの脱走

【Nコード】

N3113I

【作者名】

布切れ

【あらすじ】

動物園でのショートストーリーです。

眠い時なんかになんとなく読んでもらえると嬉しいです。

「素晴らしく臭いわね。」

彼女は微笑みながらそう言った。

「ああ。まあ動物園だからなあ。」

なかなか詩的な彼女の言葉を俺はしょうもない返事で遮ってしまった。

猿山の中にどうも目が合うヤツが居て俺はそいつに夢中だったのだ。

「雨でも降らないかしら。」

彼女は猿山の丁度誰も居ない所に目をやりながら呟いた。

「ん？いいけど傘無いぞ。」

猿山のあいっから目を離し、久しぶりに隣の彼女に向かって答えると、しばらく見ない間に彼女は随分と綺麗で物憂げな淑女に様変わりしていたから驚いた。

「馬鹿ね。雨はちゃんと時々濡れるために降るんだからいいのよ。」

初耳だ。

淑女は続ける。

「雨は匂いでしょ。」

「ああ。それは分かるな。あの匂いだろう。」

「そう、あれよ。あの匂いで覆って欲しいの。」

何か勝ち誇った顔で彼女は言った。

「でもさっきこの匂いが素晴らしいって言ってただろう。」

俺も何か勝ち誇った顔で返す。

「そうね。でも、だからなのよ。なんと言うか破壊願望みたいなもののね。」

「そんなもんかね。」

「そんなものよ。」

一匹の子猿が母猿に抱っこされたまま鳴いた。

―

立派なトゲトゲの生き物の前で止まると彼女は話し出した。

「ねえ。ヤマアラシのジレンマって知ってる。」

「いや。知らないな。」

可愛らしいヤマアラシの顔に反して彼女は随分て難しい顔をした。

「ショーペンハウアーの寓話よ。自己の自立と相手との一体感2つの欲求によるジレンマの事。」

「悪いけどもう少し分かりやすくお願いしていいかな。」

ヤマアラシは向こうを向き、そのなんとも排他的な背中をこちらに向けた。

「だからね。二匹のヤマアラシが暖め合いたいのにはヤマアラシである所以のそのトゲのせいでそうできないって言う寂しい話よ。」

「へえ。なんだかな。」

檻の中の二匹のヤマアラシは互いの頭を寄せあっていた。

―

「あ。」

おもむろにそう言うと彼女は動物園の隅にある小さな遊園地へ小走りですぐ一人向かった。

「ねえ。パンダよパンダ。」

彼女が指差す先には小さな子供がのり百円を入れると動くパンダが居た。

「なんだか懐かしいな。乗った記憶は無いけれどデパートの屋上にあったやつだ。」

彼女はパンダに跨がり一頻り考えると驚くべき計画を話し出した。

「決めたわ。私このパンダを脱走させる。」

パンダの脱走を補助した女性などそうは居ないだろう。

当然止める言葉も見当たらない。

「いつてらっしゃい。」

彼女はパンダの後頭部に百円を入れた。

「さようなら。」

彼女がそう言うのとパンダは何とも楽しそうな電子音を流しながら進んで行った。

しばらくすると、雨がポツポツと降りだした。
もうパンダは視界から消え、あの愉快な電子音もきこえなくなっていた。

不意にポケットの携帯電話が震えた。

パンダ脱走補助の彼女からだ。

「もしもし。具合はどうだい？」

「良くないわ。最悪よ。もう終わりよ。」

どうやら何か問題が起こった様だ。

「小銭が切れたのかい？今そっちに行こうか。」

「…。」

黙った彼女越しに濡れた砂利を踏む男がする。

「…パンダがね。歌わなくなったのよ。」

寂しそうな声で彼女は言った。

「ああ。あの陽気な電子音か。壊れたんだ？動かないのかい？」

「動きはするのよ。ただ歌わないの…。」

「…それなら脱走は出来るんじゃないかな。」

「ダメよ。ダメなの。…あなた大脱走って知ってる？」

「ああ。ジョン・スタージェスの映画だね。」

「そう。あれはあの陽気な大脱走のマーチがあつたから大脱走なの。」

歌のない脱走なんて寂し過ぎるわ…。」

雨は段々と強さを増してきた。

俺は濡れない為に子供が乗ってやはり百円を入れると進むパトカーに乗り込んだ。

まるで張り込み中の刑事の様にパトカーの中で煙草を燻らせていると、前から少し濡れた彼女がこちらに向かって来た。

「…隣お邪魔するわ。」

「どうぞ。」

「少し寒いわ。」

そう言うとな彼女は俺に身を寄せて来た。

「…ヤマアラシじゃなくて良かった。」

「…そうね。」

百円を入れるとパトカーはサイレンを鳴らしながら少し進んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3113i/>

ヤマアラシと雨とパンダの脱走

2010年12月18日14時30分発行